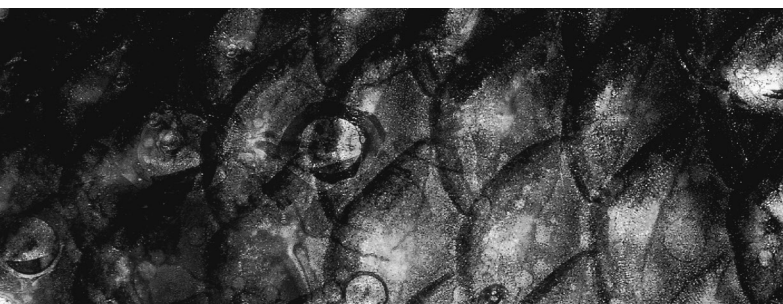


不老長呪に
まつわる
怪取材録



ウェルザード

Contents

第一章	山岡翔太	009
第二章	男にだけ見える幽霊	031
第三章	東尋坊にて	071
第四章	過去から来るモノ	113
第五章	黄泉に至る橋	181
第六章	呪いは廻る	203

辺りが漆黒に染まる時間。

地面に横たわり、涙を流していた女は、痛む身体^{からだ}を無理矢理に起こして。

自らの血で赤く染まった身体を引きずりながら、赤く燃える民家に近付いて女はただ涙を流していた。

周囲には惨殺された人達の遺体。

首が切断され、もはや誰が誰かさえわからなくなっている中で。

焼け落ちた家の中に、悶え苦しんだであろう、焼け焦げた遺体を見つけて女は、なんとか身体を動かしてそこに歩み寄った。

「あああああああっ！」

それは、女の家族だったのだろう。

まだ熱を失っていない木材を踏み、その焼け焦げた手に触れたが、すでに命を失い、人ではなくなったことを意味しているかのように、それはボロボロと崩れ落ちたのだった。

女にとって、家族の遺体さえまともに残らないこの死に方は、心を蝕むには充分なものだっただろう。

どうしてこうなった、自分達が何か悪いことをしたのかと世を恨み、こんな非道なことをした者を憎んだに違いない。

小さな子供のように泣きじゃくった声は、夜通しこの集落に響き、そして夜が明ける頃には女の顔は、恨みと憎しみで鬼のように醜悪なものに変わっていた。

だが、まだその顔には微か^{かす}に迷いがあるようにも見える。

日が昇る頃には、焼け跡と首のない遺体を残して……女の姿は消えていた。

「あ、矢島先生お疲れ様です。ちょっとお尋ねしたいことがあるんですけどお時間大丈夫ですか？」
『おや、俺に用とは珍しいね佐藤さん。時間は大丈夫ですけどどうしたかな？』
「えっとですね。日本の妖怪について調べてるんですけど、先生が住んでる福井県に人魚伝説ってありましたよね？」

八百比丘尼入定洞が小浜市にあるみたいで」
インターネットの情報だが、福井県小浜市には八百比丘尼が最期の時に入定したという場所があった。

全国各地に八百比丘尼の伝説は残っていたが、知り合いの作家、矢島が住んでいるのが福井県というのを思い出して連絡してみたというわけだ。

『ああ、聞いたことはあるな。行ったことはないけど。なに？ 来るの？ 福井県に』

「実は悩んでるんですね。それだけのためならネットから画像を拾えばいいだけです。他にも何かネタが拾えるなら行こうと思ってるんですけど」

とはいえ、福井行きを決意したくなるようなことが、そんなに簡単にポンポン出てくるとは思えない。
そう思っていたのだが。

『じゃ、俺の知り合いに靈感がとんでもなく強くて、ヤバいのを何度も見てるやつがいるから、そいつと話してみる？ 俺が住んでる場所からは距離があるけど、福井県には東尋坊や雄島もあるか

らさ』

矢島の提案に私の心は大いに揺れた。

ただ人魚に関することを調べられるだけではなく、そんな知り合いがいるのかということと、私でも知っている地名が出てきたからだ。

それに、海が近いから海鮮が美味しいというイメージもある。

だから、熟考はせずに私は答えた。

「私……行きます。福井県に」

第一章

山岡翔太

「目を覚ましたら、幽霊が俺の胸の上で睨にらんでいた」
そう語ったのは22歳の男性、山岡翔太（仮名）だ。

彼は生まれつき靈感というものが強く、他の人には見えないものが見えてしまうと話していた。その話を真剣な表情で聞いているのは私、佐藤舞まい。ホラー漫画を描いており、知り合いの作家に紹介されて、この山岡の体験談を聞かせてもらうことになったのだ。

「それで、俺はあまりの恐怖で気を失ってですね。でも朝起きたら、何もいなかったし異変もなくなっていたんですよ」

「えっと、もしかしてそれは夢だったって可能性はない？」

いわゆる心霊体験をしたことがなかった私は、この男性が嘘を言っているとは思わなかったが、思い違いということもあるかもしれないと尋ねた。

しかし、翔太は首を横に振った。

「流石さすがに夢だったらわかりますよ。それに、その時だけじゃないんです」

「うん？ 何度かそういうことがあるの？」

首を傾かげると、翔太は言いにくそうに引きつった笑みを浮かべて。

少しだけ沈黙の時間が流れた後、深呼吸をして口を開いた。

「昔から、ずっと同じ幽霊を見てるんで……寝てる俺の上にいたのは初めてですけどね」
怖がつてはいる。

けれど、そういう現象はもう慣れたと言わんばかりに目の前のドリンクを飲んだ翔太に、私はどう反応していいかわからなかった。

翔太のこの時の話はこうだ。

2年前、短大生だった頃、学生寮に住んでいたのだが、おかしいことは何度も起こっていたらしい。

翔太がその時に入居していたのは短大のC棟。
ある日、寮長に頼まれて、B棟に荷物を運ぶ手伝いをさせられることになったようだ。

このB棟というのが今は使われていない建物で、前回使われたのは新型の某ウイルスに感染した学生を隔離するため。

荷物を2階に運んでくれと言われ、翔太は気が重かったと語っていた。

なぜなら、隔離された学生達はB棟の2階で療養していたのだが、皆口を揃えて「夜中に、人がいないはずなのに廊下を誰かが歩いている足音が聞こえた」と言っていたからだ。

部屋から出なくても済むように、食料は支給されていたし、部屋にトイレもある。

B棟に隔離された学生が同じことを言っているのだから、誰かのイタズラというわけではなさそ

うだった。



『マジか……なんか嫌な予感がするんだよな』

段ボール箱を2つ抱えてB棟までやってきた俺は、入口の鍵を開けて、覚悟を決めて中に入った瞬間。

夏だというのに、全身を撫で回すような不気味な感覚に包まれて、身体中に鳥肌が立ったのがわかったのだ。

これはまずい。

昔から心霊的に危ない場所で全身に鳥肌が立つという体質だったようで、それが起こったということは、何かを見てしまう可能性があると感じていた。

冷たい空気……というわけではない。密閉されていた古い空気というか、悪いものまで一緒に溜まり続けた空気だ。

気持ちの問題かもしれないが、足を何かに掴まれているかのように重く、荷物を2階に運ばないだけだというのに先に進みたくない。

それでも、入口に放置するわけにもいかず、かきたくもない汗が流れ落ちるのを、拭うこともできない中で俺は階段へと向かった。

気味が悪いが、皆が言っているのは1階ではない。1階でこれなら、2階は一体どんなに恐ろしいのだと、不安に心を支配されながら1段1段上った。

そして、2階に上がったと同時に、視界の左側に何か白いものが見え、今までかいたこともない量の汗が一気に噴き出したのを感じて、俺は荷物をすぐに床に下ろした。

その感覚の正体を確かめようなんて思いもせず、転がり落ちるように階段を駆け下りて、B棟から逃げ出した。

『はあ……はあ……ありえんって！ マジでありえん！』

恐怖をなんとか吐き出すように、意味のない言葉をただ発して心を落ち着けようとする。

ドクンドクンと激しく鼓動する胸を押さえて、チラリと2階の窓を見た。

そこには何もいなかったが、2階から逃げるために振り返った時、確かに見たのだ。

髪の毛の長い、白い服を着た何かが睨んでいたのを。

その日の夜、1人の友人と風呂上がりに外にある喫煙所で俺は話をしていた。よりにもよって喫煙所がある場所はB棟の隣だったが、ここでしか喫煙ができないのだから仕方がない。

それに、B棟の中にいるわけではないのだから安心していったようだ。

『それでな、マジでヤバかったんだって。なんか変なもん見るし、服はずぶ濡れになるし』

『B棟はヤバいって聞くからな。それに、時々視線みたいなのを感じん？』

『本気でやめる気持ち悪い』

屋間の出来事を笑い話にできるくらいには昔から心霊体験をしていたから、この話もいつものことだった。

『というか、あいつ遅くない？ 後で行くって言うてたのに』

普段なら、3人で風呂上がりりの喫煙が日課となっているのに、友人の1人がいつまで経っても現れなかった。スマホを取り出して電話をかけてみるが、呼び出し音は鳴るものの出る様子がない。

『あいつ、出んて。何してるんだろ』

自転車小屋を改造した喫煙所。

その中で不思議そうに呟いたが、こちらに向かっているような足音が聞こえて、俺は顔を上げた。友人が来たのだろう。電話に出なかったのは、喫煙所の近くまで来ていたから出る必要がないと思っただろう。

『あいつ、今頃来たな』

友人が呆れたようにそう言つて、ドアのほうに目を向ける。足音がドアの前までやってきて、慣れた友人の顔が見える……というのを想像していたが、ドアが開くことはない。

俺も友人も、ドアを見ながら数分間ぼんやりと待っていたのだが、次第にイライラし始めて。

先にドアを開けたら負けだという、わけのわからない感情があつたのは事実。

だけど何かがおかしいと感じ、俺はドアに手を伸ばした。

当然、喫煙をするのは3人だけではない。他の学生かもしれないからと、何も言わずにドアを開けたのだが……そこには誰もいなかったのだ。

『は？ いや、誰かここまで来ただろ。翔太も聞いたよな？ 足音』

『聞こえた。サンダルみたいな、地面を擦るような音……』

『意味わからん……じゃあなんだったんだ今は』

気味の悪さは感じたが、それでも友人が怖がらせようとしてどこかに隠れているのかもしれないという可能性は拭えずに、2人は喫煙所を出た。

C棟に入つてすぐに寮長室があり、出入りする学生は寮長が確認することができる。

2人は寮長に尋ねたが、最後に出たのが自分達だったと聞き、ますますあの足音はなんだったのだと悩むことになった。ちなみに友人は、恋人と電話をしていて喫煙所には行かなかったらしい。

時間は23時過ぎ。俺はベッドに横になってスマホを眺めていた。

足元に窓があるようにベッドを配置し、夜はおかしなものを見ないようにとカーテンを引いていた。

そろそろ寝るか、照明を消して眠りに就いたが、しばらくして目を覚ますと、今まで経験したことのないレベルの金縛りに襲われていて、かろうじて首を動かせるだけ。

(声も出せないし身体が動かん。何がどうなってるんだ)

手も足も、全身が自分のものではないような、石にでもなったかのようにでピクリとも動かない中、必死に状況を確認しようと目と首を動かした。

スマホがあるからと、部屋には時計がない。今が何時かわからないが、窓から見える黒い空が、

まだ夜中だということを教えてくれている。

(……は？　なんでカーテンが開いてるんだよ)

寝る前に、窓を隠すようにカーテンを引いたのを確認していた。

なのに、今は左半分が開いているのだ。

これは夢かと思い、確認するために軽く舌を噛んでみたが、痛みを感じる。

だったらなぜカーテンが開いているのだと、嫌な感覚に包まれた。

金縛りで動かない身体に、昼間のような汗の噴出を感じる。

顔にも汗が噴き出して、拭えもしないのに汗が垂れて。

それでも窓を凝視し続けたが……特に何も起こらない。

金縛りが解けたわけではなかったが、俺は少し安心して、窓から目を離そうとした時。

バンッ！

と、窓ガラスを叩く音と共に、髪の毛の長い女が張りついて、見開いた目で俺を凝視したのだった。

(ぎゃああああああっ！)

声が出なくて心の中で叫んだが、あまりにもハッキリと見えてしまった何かに恐怖し、初めて失神というものを経験したのだ。

次に目を覚ました時、全身が汗まみれで、気持ち悪さを感じていたが、金縛りは解けておらず、やはり首しか動かせない状態に焦り、慌てて窓のほうを見た。

そして俺は絶望に襲われる。

カーテンが開いている左半分。

鍵がかかっているその窓が、なぜか全開だったからだ。

俺の部屋は6階。外からは当然、そんな高さの場所に辿り着くことなどできない。

(ヤバい、さっきのやつが部屋の中に入ってきたのか!?　金縛りで動けないのにどうすればいいんだよ!)

追いつめられた俺は必死に考えるが、この状態では何もすることができない。

霊感は強いが祓えるわけでもないし、逃げることもできないのだ。

部屋のどこにいるんだ。

ベッドの横か、部屋の入口かと首を動かして確認するが……そうではなかった。

視界の下の方に見えた黒い塊に気付き、窓のほう、自分の身体の上に目を向けた俺は。

『……許さない』

自分の胸の上でそう呟いて、鬼のような形相で睨みつける女の幽霊に恐怖し、その日2度目の失神をしたのだった。



この話を、海が見える飲食店でバーガーを食べながら私は聞いていた。

怪談というのは、結構作り込まれていて、意外な展開や予想外の結末というのがあったりするが、靈感があるという人の話は大体がシンプル。

翔太の話もシンプルだからこそ、本当に見えている、感じているのだろうと思った。「それでですね、朝起きたら窓もカーテンも閉まってたんですよ。だけど汗は酷くて、まるでおねしょでもしたみたいになってましたね」

「じゃあ、夢という可能性は……」

「多分ないです。幽霊が乗ってた場所が筋肉痛みたいになって痛かったし、軽く舌を嚙んだつもりだったんですけど、思ったより強く嚙んでみたいで。血が出て口の中が赤かったし、痛みが残ってたんですよ」

それほど強い証拠とは言い難かったけれど、目の前の男性が作り話をしているとは思えない真剣さは感じたし、話にも淀みがなかったから、私は信じることにした。

「じゃあ、最後に聞いたっていう『許さない』ってどういうこと？ 翔太くん、何か幽霊に恨みをかうことでもした？ それか……捨てた彼女が自殺して化けて出たとか」

「冗談はやめてくださいよ。昔から見てるって言ってるじゃないですか。本当に、子供の頃から同じ幽霊を見てるんですから。見た目はチャラくても、真面目なんですよ俺」

翔太の見た目は自分で言うように、金髪で浅黒く、海でナンパでもしていそうなチャラい雰囲気がある。身長も高く、ガツシリとした体格で、靈感があるという割には、そうとは思えないような不良漫画にでも出てきそうな風貌をしていた。

そのアンバランスさが、不思議な説得力を生んでいるのだろうかと思わずにはいられなかった。

「そう言えば、先生から聞いたんだけど、お母さんや妹弟も^{きょうだい}靈感が強いって本当？」

「先生……ああ、矢島さんですね。本当ですよ。母親似の2番目の妹と、弟は靈感強いですね。1

番強いのは母親ですけど」

矢島というのは、私の知り合いの作家で、翔太を引き合わせてくれた人物。

このテーブルから離れて、カウンターで1人でコーヒを飲んでいる。

「じゃあ、お母さんたちは翔太くんと同じように見えるってことだね？ 昔から女の人の幽霊が見えるなら、お母さんは何か知らないのかな」

「うーん。俺もそう思って、昔聞いたことがあるんですけど、どうも母親と妹はその女の幽霊を見たことがほとんどないですね。だから見えたとしても、普段見える他の幽霊と区別がつかないというか……」

「頻度の問題か。あれ？ じゃあ弟さんは見るってこと？」

そう尋ねると、翔太は小さく頷いた。

「同じ幽霊かはわからないんですけど、弟のほうが酷くて。寝てたら突然悲鳴を上げたり、暴れたりするから、布団の下に御札を貼って寝てるくらいです。まだ小学生なんですけどね」

布団に御札を貼って寝ているなんて、余程幽霊に悩まされているのだろうと、想像しながら私は顔を引きつらせた。

「祖父の家に泊まりに行ったことがあったんですよ。かなり古い家だったんですけど。弟がトイレに行った時に悲鳴が聞こえて、駆けつけたら泣き叫んでいる。何があったか聞いてみると、『知らない人がいる！』って。トイレに小窓が付いてるんですけど、そこに女の人の顔があったんです」

「ち、小さい子供にそれは怖いね。でも……なんか、翔太くんの話に似てるね」
学生寮の窓に張りついていた女の幽霊といい、祖父の家で見た女の幽霊といい、細部は違えど同じことをしている。

「確かにそうですね。なんなんですかね？」

そう言われても、わかるはずがない。だけど、翔太と弟の前に女の幽霊が現れて、母親と妹の前には他の幽霊と同じような頻度というのは偏っているように感じていた。

「男の前にしか現れない幽霊？ まあ、幽霊も異性がいいのかな？ わからないけど」

「そんなの遠慮したいですけどね……」

翔太の話は、靈感がある人の実体験としては面白いと感じていたが、作品にするにはパンチが弱い。やはり話がシンプルで、今のままでは短編にすらならないだろう。

「俺の母親がお寺の家系なんですけど」

思い出したかのように口を開いた翔太に、顔を上げる。

母親と、母親似の兄弟が靈感が強いという話だから、そちらの血筋に何かあるのか。

「従兄弟が心靈スポットに行ったんですけどね、いわゆる霊障ってやつに襲われましてね。その現場で全身が痙攣して、泡を吹いて倒れたんですよ」

その人も翔太と同じように靈感が強かったのだろう。

それにしても、靈感が強くてそんな場所に行くなんて、何かが起こるとは思わなかったのだからと、私は少し呆れた。

「でね、友達が慌てて救急車を呼んで搬送されたんですけど、結構ヤバイ状態が続いてですね。お寺の住職をやっている親が来て、霊を祓ったんですけど、あと少し遅かったら危なかったって言ってましたね」

この話は翔太本人が見ていないからか、少し作り話のような印象を受ける。

だからこそ、翔太自身が経験した話については、信憑性が増すということになってしまふのだが。この話をどう作品に落とし込むかと、小さく唸りながら考えていると、今まで離れた席でコーヒーを飲んでいた矢島がおもむろに立ち上がり、私達の席にやってくると、翔太の隣に腰を下ろした。

「悩んでるな佐藤さん。今の話で気になったところはあるか？」

「えっと……翔太くんと弟さんにだけ頻繁に現れるっていう女の幽霊ですかね。母親と妹さんの前にはあまり現れないみたいですし」

「だったら、その謎を解明する話を書いたらどうだ？ どうして翔太くんと弟の前だけに現れるのか、小さい頃からいろんな場所で見ているなら、ただの浮遊霊や地縛霊というわけでもなさそうだし」

矢島の言葉に、私は翔太と顔を見合わせた。

確かに、謎に迫れば面白い話になるかもしれないけど、私には靈感がない。

翔太に見えるものが、私には見えないのだから、何が真実かわからない。

「それで、俺は何をすればいいんですか？ 母親に話を聞くとしても、何を聞けばいいのか」

「そうだな。真理（仮名）さんと話ができる場を作ってくれないか。直接話を聞いたほうがいいだろうし」

真理というのは翔太の母親の名前で、矢島とは面識があるようだ。

きつと翔太では、女の幽霊が見えるのが当たり前になりすぎていて、何を聞けばいいかわからないだろうという考えが矢島にはあったのだろう。

「とりあえず、いつ話ができるか聞いておきますね。早いほうがいいですよ？ 佐藤さん、東京の人だし」

矢島の紹介ということで、旅行がてら福井県の高浜町たかはまちょうまでやってきていた私には、その申し出はありがたかった。いくら取材を伴っているとはいえ、長期間滞在するわけにもいかなかったからだ。「気を遣ってくれてありがとう。そうだね。できるだけ早いほうが助かるかな」

そんな私を見て、矢島はこの飲食店のマスターのほうに視線を向けて手招きした。

「はい！ なんですか矢島さん！」

大きく、しゃがれた声で返事をしたマスターが、満面の笑みを浮かべて近付いてくる。

「この辺りでさ、心霊スポットみたいな所ってない？ 変な噂を聞く空き家とか廃屋とか」

あまりにも突然、わけのわからないことを言う矢島に、私は顔をしかめたが、それはマスターも

同じだった。

きつと、翔太の母親と話をするまでの時間を、退屈しないようにしてくれているのだろうと思っ
たが、それにしても唐突である。

「いやあ……心霊スポットですか。そんな急に言われても……ありますね」

「いや、あるんかい！」

矢島が間髪容れずにツツコミを入れるのは、福井県とはいえ関西に近い高浜町に住んでいるだけ
はあると、私は感心した。

「この店の向かいの青い家なんですけどね」

「目の前じゃねえか。てか、青い家なんてあったか？」

店の窓から見える景色に目を向けると、確かに青い壁の家が見える。

「皆そう言うんですよ。あんなに目立つ家なのに、誰の記憶にも残ってないんです」

その家を凝視するが、特に妙な感覚はない。

マスターが言うように、記憶に残っていないというのは、空の青色に溶けてしまうのか、海の近
くだから皆そっちを見るから家を見ないのかと考えを巡らせたが、答えは出ない。

「でね、あの家は別荘なんですけど、持ち主が何度も変わってるんですよ。もう5人くらい変わっ
てるのかな。幽霊を見たって人もいるんですよ」

「ふーん。ちょっと見に行つてきてもいい？ ちゃんと戻ってくるから」

「いいですよ。矢島さんが食い逃げしても、後でしっかり取り立てるんで！」

笑ってそう言うマスターに、矢島も笑ってみせる。

地元の店で顔見知りだからこそ、そういう信頼関係が築けているのだろうと、少し羨ましくなった。

私と翔太、矢島の3人で店の外に出て、青い家を見上げる。

霊感のない私と矢島にとっては、なんてことのない平凡な別荘といった感じだが、翔太は眉をひそめて見ていた。

「翔太くんは何か感じるか？」

「左脚が……痛いです。俺、怪我をするのも左半身だけだし、何かあるのかも」

家の前を横切り、門のほうにやってきたが、人の気配はない。

やはり、別荘というだけあって、普段は人がいないのだろう。

「先生、どう見ます？」

「うん、何もわからんね」

人がいないという独特の不気味さを感じるが、それ以上は何もわからない。

それも、別荘で人がいないという情報があったからこそで、その話を知らなければただの民家で不気味だとは思わなかっただろう。

特に何もないと、青い家を見ながら店に戻ったが、翔太は店の入口の前ですと青い家を目を細めて眺めていた。

「どうしたの？ 何か見える？」

立ち止まっている翔太に声をかけ、視線の先にある青い家を見る。

「2階の……ベランダがある部屋。あそこだけなんか異質なんですよ」

その言葉に、私と矢島は同じように目を凝らして見つめる。

「別荘ということは、今はあの家は戸締りしてるわけですよ？ 風なんて部屋の中に吹かないですよね？」

「戸締りができてるならな。というか今日は風が吹いてないだろ。無風だよ無風」

近くの木を見て、葉が揺れていないのを確認して矢島が答えたが、翔太はベランダのある部屋を指差して言う。

「じゃあ、なんでカーテンが揺れているんですか？」

翔太はそう言うが、私の目には半分開いたカーテンが映るだけで、それが揺れているとは思えない。

私には見えないレベルの細かな揺れを、翔太には見えているのかと思ったが、どうやらそうではなかったようだ。

「あ、くそっ！ 目が合った！」

目を逸らしたと同時に、悔しそうに言った翔太に、私はどうしていいかわからない。

「な、なに。何と目が合ったのよ。怖いじゃない」

「……あの女の幽霊でした。カーテンが揺れていたんじゃないくて、あの幽霊が立ってたんです。それがカーテンの揺れに見えた」

まさか、自分が見ていた場所に幽霊がいたなどとは思わずに、ゾクリと背筋に冷たいものが流れた。

私達は店内に入り、話の続きを始める。

「大丈夫か翔太くん。でも、女の幽霊は頻繁に見るんだろ？」

翔太のグラスに水を注いで、落ち着かせようとする矢島だったが、何やら戸惑っている様子。「見るんですけど……違うんですよ。太陽が出ている間は、なんと言うか……陽の気が満ちているから、幽霊を見ることはなかったんです。陽の気が無くなった夜に幽霊を見ることはあっても、昼に見るなんてことはなかったんです」

見るはずのない時間に幽霊を見てしまったというショックは大きいのだろう。

きつと彼にとつては、昼は何も見ることがない安心できる時間だっただろうから。

「じゃあどうして急に、昼にも幽霊が見えるようになったのかな。今までは夜にしか見なかったわけでしょ？」

「いや、まあ……例外はあったんですけどね。たとえば、ずっと放置されてて悪い気が溜まっているような場所とか。そんな場所では絶対に何か起こるから、俺は近付かなかったんですけど」

その理屈だと、やはりあの青い家は別荘ということで、人の出入りも少なくて翔太の言う「悪い気」が溜まっていたということなのだろう。

少しの沈黙が流れた後、マスターが笑顔でテーブルまでやってきた。

「どうです？ 何か見えました？」

こういった話が好きなのか、好奇心が強いのか、マスターの表情は明るい。

「彼が見えちゃったみたいです。あの青い家、持ち主はどこの人なんですか？ あ、でも5人も持ち主が変わってるからそこは関係ないのか」

私がそう尋ねると、マスターは驚いたような表情を浮かべた後、思い出すように顔をしかめる。

「うーん……確か、三^み国の人だって聞いたことがありますね。今の人になってから長いですね。もう5年になりますけど、幽霊を見ないから長続きしてるのかな」

「三^み国？」

福井の人間ではない私にとって、地名を言われてもわからない。

それを察した矢島が、口を開いた。

「東尋坊があるところだよ。知ってるでしょ、あの断崖絶壁の」

「あ、ああ。サスペンスドラマのラストシーンで使われてた場所ですね」
すぐにスマホで検索して出てきた、奇妙な形をした断崖絶壁。

その昔、人に迷惑をかけてばかりいた東尋坊というお坊さんを酔わせて、突き落として殺害したと言われる場所だ。この地名も、そのお坊さんから取ったと言われている。

ホラー好きには、東尋坊と共に近くにある雄島も知名度が高い。テレビの心霊特集でも、雄島が取り上げられたことがあったからだ。

「他の人は1回使ったら売りに出してたのに、何度か使ってるみたいですよ、その人は」

「鈍感なのかな。それとも、その人には何も起こらないかのどっちかってことかな」

「理由はわからないですけどねえ」

それだけ言うと、マスターはキツチンのほうに戻っていった。

矢島からしてみれば、私の暇潰しになるかと思って尋ねただけだったのだが、思いもよらず翔太にシヨックを与えた結果となってしまい、少し責任を感じることになった。

「……あ、連絡来てました。明日の夜なら大丈夫みたいです」

母親からのメッセージに気付いてそう言った翔太。

明日の夜ということは、昼間は時間がある。海が綺麗なこの高浜町に来たのだから、泳がないにしても海に行こうかなと、目の前の海を見ながら私は考えた。

小学生の弟達が帰ってくる時間には家にいなければならない、と翔太は言う。

まだ太陽が高い位置にあったが、ひとまず別れて、私は矢島の車に乗って、城山公園しろやまこうえんという場所に移動した。

この城山公園内にある「八穴やなの奇勝きしょう」の1つに明鏡洞めいきやうどうがあり、岩に大きな穴が開いていて、そこから見える水平線がなんとも美しい場所だ。

「先生は、翔太くんとは知り合いなんですよね？」

「何年か前にやってたお化け屋敷でバイトで来てくれてね。そこでもおかしいことが起こったものだよ」

「その場所も何かがいるってことですか？」

私も過去に、矢島がやってたお化け屋敷に行ったことがあった。

その時はあまりの恐ろしさで、号泣してしまっただけだったが、それを思い出して苦笑いする。遊歩道の縁石に腰を下ろして、矢島がポツリポツリと語り始める。

「最初はそうだと思ってたんだ。あまりにも翔太くんが幽霊を見るって言うもんだから、曰くつきの場所なのかなってね。管理人はいたけど、長く使われないでいたし、悪い気が溜まっていってもおかしくなかったし」

「違うんですか？」

「あれはきつと、翔太くんが連れてきたんだよ。実際、翔太くんがバイトに来るまではそんな話は聞かなかつたし、あいつが休みの日には何も起こらなかったから」

そう聞くと、確かに翔太が幽霊を連れてきたと考えても不思議ではない。

いや、むしろそう考えるほうが自然なのだろうと思わずにはいられなかった。

「……先生はどう思います？ 翔太くんが見る女の幽霊」

「真理さんの話を聞かないとわからないけど、翔太くんだけじゃなく、弟にまで同じ幽霊が見えるというなら……翔太くんではなくて、真理さんの血筋ちまきに関係してるかもしれないな」

「ああ、末代まで崇るってやつですか。もしそうだとしたら、翔太くんは何もしていないのかわいそうですね」

母親の血筋、そして男性の前に頻繁に現れるという女の幽霊。

女性の前にはあまり現れないという理由がわからないが、私も矢島も、翔太でさえも血を遡るし

か方法がないのだ。

近い世代で起こったことならば辿り着けると思っていたが、もしもそれよりも昔に起こったことなら、真実に辿り着くのは難しいのではないか。

「先生、明日時間ありますか？」

「昼は空いてる。でも夜は予定があつてね。佐藤さんだけで話を聞いてきてくれるかな？」

「……投げっぱなしなんだから。でもいいです。じゃあ昼に付き合ってください。せっかく高浜町に来たんだから、八百比丘尼入定洞に行ってみたいんです」

八百比丘尼入定洞は2つ隣の小浜市にある。

矢島は「わかった」と笑った。

第二章 男にだけ見える幽霊

翌日、ホテルまで迎えに来た矢島の車に乗り、小浜市にある八百比丘尼入定洞に向かう。

高浜町から小浜市までのほとんどの間、国道27号線は日本海を望むことができて、私は旅行気分

に浸っていた。

「ところで、八百比丘尼と言えば**人魚**だけど、佐藤さんは人魚と言えどどんな姿を想像する？」

走り慣れた道を、海は見飽きたと言わんばかりの様子で、私に視線を向けて尋ねる矢島。

「先生、しっかり前を見て運転してください」

そう言われて、矢島は渋々前を見る。

「人魚ですか……下半身が魚みたいで、上半身は綺麗な女性ってイメージですね」

「ふむ。いわゆるマーメイドってやつだな。西洋から入ってきた情報が、日本に元々あった情報を上書きして定着した姿だ」

だとすると、日本での人魚はその姿ではないのだろうか、私は首を傾げて矢島を見た。

確かに、マーメイドのイメージは映像作品やゲーム、漫画なんかも多く使用されているから、小さい頃からそうだと印象付けられていたと思い返す。

それでも、マーメイド以外の姿が思いつかない。

思い通りの展開になってニヤニヤしている矢島に少しイラつきながら、私は尋ねる。

「じゃあ、日本の人魚はどんな姿だって言うんですか。知ってるなら教えてくださいよ」

スマホで調べようと思えば簡単に調べられたが、それは矢島の口から聞いてからだ、意地でも自分では調べない。

そんな性格を知っているからこそ、矢島は勝ち誇ったかのように1つ咳払いをして、私に視線を向けた。

「だから、前を向いて運転してくださいよ」

注意されて悔しそうに前を向いた矢島は、小さくため息をついて話し始める。

「日本の人魚は、魚の頭部の代わりに、人間の頭部が付いているイメージだ。つまり、**人間らしいところは頭だけで、残りは全部魚**なんだよ」

「……ほとんど化け物ですね。昔に流行った人面魚みたいじゃないですか」

1990年代に、人の顔があるように見える錦鯉が話題になったが、そういったものが人魚と呼ばれたのではないかと、海を眺めながら考えた。

「実は高浜町にも人魚の話はあってね。時代はいつか忘れたけど、**音海地区**という場所で漁師が見たって伝承があるんだ」

「え？　そうなんですか？　でも、海が近くにある高浜町だったら、そんな話があってもおかしくなさそうに思えるのは不思議ですね」

その理屈で言ってしまうと、山があったら**山姥**がいそう、湖があったらネッシーのような生物がいそうになってしまうのだから。

「昔、音海地区の漁師が漁に出ていたんだけど、岩の上に大きな魚が休むように乗っているのを見

かけたんだ」

漁と言っても、今の時代のような漁船ではない。細長く大きな手漕ぎ船のようなものだ。

「でもよく見てみると魚の頭部の代わりに、人間の頭部が付いていたんだ。しかも、鶏のトサカのような襟巻が付いていたと言われている」

「へえ。なんだか気持ち悪いですね。そんなの見たら私なら……」

そこまで言って、気付いてしまった。

高浜町も小浜市も、同じ若狭湾に面している。もしかして八百比丘尼は……

「で、その漁師も佐藤さんと同じように気持ち悪いと思ったんだろうね。それを見るなり、船の櫂で殴り殺して家に帰ったらしいよ」

あまりに予想外の展開に、私は肩透かしを食らったような気分になった。捕獲したとか、持ち帰って食べたとかいう話になるかと思ったのに、まさか殴り殺して終わりだとは。

「え、ええ!? てつきり私は、その人魚の肉を八百比丘尼が食べたと思ったのに」

「八百比丘尼の出生地は諸説あるからね。全国各地に伝承があるわけだから、この若狭で生まれた確証なんてないよ。人魚だって、日本各地で見たって話があるだろうからね」

「確かにそうですね……」

その漁師と、八百比丘尼が若い頃の時代が合っていれば、もしかしてと思ったが、それがわかっているならとくに民俗学者がその答えに辿り着いているだろう。

私はスマホを取り出し、検索エンジンに「人魚 日本」と打ち込んで検索をかけると、確かに矢

島が言ったような、頭部だけが魚の日本画がある。

中には、胸から上が人間という絵もあるが、矢島が知っている伝承では、頭部が人間のパターン。

「うわあ……ただの化け物じゃないですか。妖怪の類じゃないですか、これ」

「人魚の肉を食べれば不老長寿になる。八百比丘尼は人魚の肉を食べて、何百年経っても若い女性姿だったと言われているね」

その最期は、若狭の殿様の病気を治すために寿命を与えて死んだと言われている。不死ではなく、死んだから長寿となったのだろうと考えられるが、逸話や伝承などはそんなものだ。

「こんな化け物の肉だとわかっていたら、食べたいとは思えませんがね……」

「間違いないね」

話をしながら約25分。車を走らせて、アップダウンの激しい道の途中で、路地へと入る。

古い建物が並ぶ道。昔の色町だったのか、2階には格子のついた窓が今でも残る建物がちらほらとあって、それは私にとっては不思議な光景だった。

そんな民家が並ぶ道路を走ってしばらく。矢島は、お寺の駐車場に車を停めてエンジンを切った。

「さて、着いたよ。この空印寺に八百比丘尼入定洞がある」

すぐに車から降りる準備をする矢島を見て、慌ててシートベルトを外して降りる。

山の麓にあるお寺と、その横にある八百比丘尼入定洞。

案内板に従って歩くと、それほど時間もかからずに目的の洞穴へとやってくる事ができた。

穴の入口には柵が設けられ、中には入れないようになってはいたが、何か不思議な空気が漂って

いるようで、周囲を気にしながらもスマホで写真を撮った。

「……こういう場所の独特の空気が流れている感じがありますよね。張りつめてるといっか、なんか変な気分です」

「ま、人は伝説やら神話には弱いからね。先入観とか思い込みなんかで、なんでもない場所でさえ神聖に感じたりするから」

「浸ってるのに水を差さないでくださいよ……」

必死に写真を撮っている私を尻目に、矢島は解説板を読んでいる。

「八百比丘尼は椿の花が好きだったんだとさ。この入口にも椿が植えられてるんだって。お祈りをすれば、不思議な霊験が現れるって書いてある」

「やっぱり神聖な場所なんだろうね。私もお祈りしておきます」

言葉では言い表せない空気が漂う中で、何を祈るべきかと手を合わせて目を閉じた私は、夜に会う翔太の無事を祈った。

その夜、ホテルに戻っていた私は、翔太の家に向かうと、家族総出で出迎えを受けて家に入ることに。

挨拶をしようとしても、有無を言わずに案内されて、言われるがまま。

詳しい場所や建物の特徴は言えないが、リビングに通された私は、はしゃいでいる小学生の男の子と女の子を見て笑顔になった。

だが、この男の子が翔太が言っていた、女の幽霊をよく見ている子なのだ。

「舞さんは漫画家さんなんですか？ サインもらっておこうかしら」

「おかん、矢島さんには言わないのになんで舞さんには言うんだよ」

「矢島さんはほら、いつでももらえるから」

笑顔でそう言う翔太の母親、真理は、物怖じしない豪快なお母さんといった印象だ。

「あ、は、初めまして。佐藤舞と申します。今回、矢島先生に翔太くんを紹介されて。それでいろいろお母さんにもお尋ねしたいと思ってお邪魔しました」

「そんなにかしこまらなくてもいいのに。ほら、うちは騒がしいから、舞さんも気楽にしてくださいな」

細かいことは気にしないような真理だが、霊感が翔太よりも強いと言っていた。もつと繊細そうな人を想像してただけに、良い意味で裏切られたと勝手に感じて微笑む。

「それで……霊感が強いのは、お母さんの家系だと聞いたんですが」

私が尋ねると、真理は笑顔を崩さずに小さく何度も頷く。

「私がお寺の家系でね。それが理由かはわからないけど、おかしなものを見たり感じたりすることはあるんですよ」

「翔太くんが小さい頃から女の幽霊を見るという話は聞いてますよね？ お母さんはあまり見ないと聞きました」

「そうなんです。この子と下の男の子がよく見るみたいで。私と2番目の娘も霊感は強いんです」

けど、どの幽霊のことを言っているかわからなくてね」

なんと言うか、もっとう暗い話になるかと思っていたが、あまりにも明るく話す真理に、私は戸惑いを感じずにはいられなかった。幽霊が見える人全てが陰気なわけではないと頭では理解していたが、まるで井戸端会議でもしているようではないか。

「ご家族……お母さんの先祖の中に、同じ幽霊を見たって話は聞いたことがありますか？」

「先祖と言われてもねえ。私のお父さんもお母さんも霊感があったけど……あ、でも小さい頃にお母さんが言っていたことがあったね。『悪い子は、怖い女の人に連れていかれる』ってね」

怖い女の人というのが、翔太が見ている女の幽霊とは限らないが、この家系に関してはなんとなくそうなのではないかと思わずにはいられなかった。

あの女の幽霊が、男性の前に頻繁に現れるというのなら、真理の父親の前にも現れる可能性が高い。

だが、真理がそんな話を父親から聞いたことがないとなると、母親の家系に関係がある。

真理の母親の祖父が言っていたと仮定するなら、その人も同じ幽霊を見たのではないか。

「その怖い女の人というのが、翔太くん達が見ている幽霊という可能性はありますよね。髪の毛長い女の人で、白い着物のようなものを着ているって聞きました」

「白い着物……ねえ。まるで死装束みたいだね。まあ、幽霊なんだからそれも当然なのか。というか翔太、あんたそんなこと全然言っていなかったじゃないか！」

笑顔だった真理が、突然翔太を睨みつけて強い口調になる。

「何回か言っただろ！ おかんは見たかもしれないけど忘れたっていつも言ってるから！」

「あらそう？ だったらいいわ。それにしても私のひいおじいちゃんが同じ幽霊を見たとなると……随分古い幽霊だね。余程うちの家系の男に恨みがあるみたいだね」

翔太の肩をバンバンと叩き、笑ってみせるが、翔太からすればたまったものではない。

「笑い事じゃないっての！ 俺は何もしてないのに、勝手に恨まれてるとか勘弁してほしいわ！」

誰が何をして女の幽霊に恨まれているか知らないが、翔太からしてみればたまったものではないだろう。しかし、ここでただ状況を話し合っているだけでは何も解決はしない。

騒いでいた小学生の子供達が別の部屋に行き、少し静かになったリビングで話をしていた時だった。

「そう言えば……ひいおじいちゃんは元々高浜の人じゃないって言ってたかな。よそから引っ越してきたって……」

そこまで真理が言った瞬間。

突然、部屋の照明が消えて、真っ暗になってしまったのだ。

「ひっ！ 何!？」

思わず声を上げたが、翔太は冷静に窓の外の街灯が点いていることを確認して立ち上がる。

「ブレーカーが落ちたかな。ちょっと見てくる」

そう言ってスマホの明かりを点けて、玄関のほうへと歩き始めた。

が、その足を止める金切り声のような悲鳴が家の中に響いたのだ。

「ぎゃああああああああああつ！」

隣の部屋から聞こえた男の子の悲鳴に、私もつられて声を上げる。

「いやああああああああつ！」

玄関に向かっていた翔太が、弟と私の悲鳴に驚いて、慌てて隣の部屋へと向かう。

真理も何事かと、スマホを持って立ち上がり、隣の部屋に。

「ま、ま、待ってください。わ、私を置いていかないで……」

腰が抜けて、這って2人の後を追う私。

隣の部屋に入ると、何が起こったかわからずに慌てている女の子と、窓を見て泣き喚く男の子の姿があった。

「こ、康太（仮名）！ どうした……」

泣き喚く康太を見て、その指の先にある窓を見た翔太が思わず息を呑む。

「ああああああん！ 誰かいた！ 怖い人が窓に張りついていた！」

真理は康太に駆け寄って、宥めるように背中をさする。

私はその光景がまったく理解できずに、ただ首を傾げることしかできなかった。

「大丈夫大丈夫。ほら、何もいないから安心しな」

康太が見たという、窓に張りついていた怖い人。

当然私には何も見えなかったが、翔太から聞いた話に似ている。

そして、窓を見て呆然と立ち尽くしている翔太は、恐らくそれを見たに違いない。

暗闇の中、しばらく康太を宥めていたが、突然照明が点いて私は周囲を見回した。

玄関には不思議そうにこちらを見ている高校生の妹、奈穂（仮名）がパンツ1枚の下着姿でブレーカーを上げていたのだった。

「お、お前！ お客さんがいるのになんて格好なんだよ！」

慌てて翔太が声を上げた。

「あ、ごめんなさい！ お客さんがいたのに普段通りに出ちゃいました！」

慌てて奈穂は脱衣所へと戻ったが、つまり普段はこの格好で家の中をうろついているということなのだろう。

高校生の女の子が、翔太だっているのにあんな格好で堂々と出てくるなんて考えたが、他人の家のことに口出しなどできるはずがない。

「き、きつとブレーカーが落ちたから慌ててたんだよ……きつと」

そうフォローするのが精一杯だった。

「すみません。話の途中だったのに。康太がああなつたら、多分もう話ができません。あいつ、母親から離れないと思うので」

それにしても、核心的な話に迫りそうなタイピングでこんなことが起こるとはと、まだ泣いている康太を見ながら、私は小さくため息をついた。

だからと言って、この状況で話の続きを聞こうとするほど、空気が読めないわけでもない。

「うん。仕方ないね。まあ、話の続きは後で翔太くんに聞いてもらうとして……ちよつと外に出ら

れる？ 少し話ただけでもわかったことがあるから、整理しておきたいの」

「俺なら全然大丈夫です」

そう言い、外に出てくると真理に告げた翔太は、私と一緒に家を出た。

私の車に乗り、あてもなく小さな町を回りながら話の整理。

「まず、翔太くんや弟さんが見ている女の幽霊は、真理さんのお母さんのおじいさんにも見えてた可能性が高いよね。怖い女の人に連れていかれるなんて、普通言わないと思うもの」

「確かに。俺が小さい頃は『鬼が来る』って脅されてましたからね。怪物ならまだしも、怖い女の人っていうのは、そうかもしれませんね」

センターラインのない一車線の道路を走っているが、田舎だからか路上駐車が多く、いつも以上に慎重に走る。

先程の話の続きが聞けないかと、翔太からメッセージで聞いてもらってはいたが、康太が泣き止まないのか、まだ真理からの返事はない。

「それにしても、おかんのひいおじいさんって、ばあちゃんの父方ですかね、母方ですかね。てか、俺の霊感って何代も続いてるってことですか？ ヤバくないです？」

「……多分、真理さんのお母さんのお父さんのお父さんだと思うよ」

運転に必死なように見えて、あっさりとそう答えた私に、翔太は驚いたような表情を見せた。

「なんでそう思うんです？」

「女の幽霊が、翔太くんの家系の男にしか見えないと仮定したら、翔太くんのおばあちゃんはそ

話を父親からもされてると思うから。だけど聞いたのはおじいちゃんから。だったら母方なんじゃないかなって」

私の言葉を頭の中で整理しながら考えていた翔太が、その意味を理解したのか驚きの表情を浮かべて。

「うわ、本当だ！ すごいすね舞さん！ 俺、結構そこでモヤモヤしてたのに！」

「前提があつたからね。そして、さっきの弟さんの件で確信したことがあるんだ」

「確信？ 何を確信したんですか？」

翔太が尋ねると、私は正面を向いたまま答えた。

「多分、真理さんは翔太くんが言っている女の幽霊は見えてない。弟さんがいる部屋に入った時、驚いたのは翔太くんだけだったから」

翔太から真理は女の幽霊はたまに見ると聞いていたが、それはきつと「髪が長い、白い服を着た女の幽霊」という特徴が合っているだけなのではと私は考える。

そうでなければ、康太が窓を指さしている状況で確認しないはずがないのだから。

「ああ……なるほど。というか舞さん、そんなところまで見てたんですね。漫画家ってすごいな」

「ありがと。私よりすごい人なんてたくさんいるけどね。まだまだ私も頑張らないと」

そう呟いて車を走らせて、ようやくセンターラインが引かれた二車線の道路に出た。

そこでひと安心したように息を吐いた私に、何かを不思議に思った翔太が首を傾げて口を開いた。

「あれ……だとすると、あの幽霊って男にしか見えないってことじゃないですか？」

男は頻繁に見えて女はあまり見ないというのと、男にしか見えないのでは意味合いがかなり異なる。しかも、翔太の話では女の幽霊は睨んでいて、恨みが強いように思えるからだ。

「……そうだね。翔太くんの家に行くまでは、靈感がある家族は皆1度は見ると思い込んでたけど、真理さんが見えてないってことがわかったからね」

「俺、てっきり皆見てるものだと思ってました。妹も……あ、さっきパンイチでいたやつなんですけど。あいつの高校の弓道場でもちよつとヤバいことが起こったんですよ」

20時だというのに辺りには人気がなく、街灯の明かりしかない暗い道で、もしかして怖い話を聞くのかと私は思ったが、聞かないわけにはいかなくてハンドルをしっかりと握って身構えた。

「へ、へえ……どんな？」

「あいつ……奈穂は弓道部なんですけどね。部活をやった時に、天井の板がズレて開いていたらしいんですよ。屋根裏は物置になってて、それ自体はごく稀にあるらしいんですけど」

弓道場と言えば、屋根のある板張りの床と、遠く離れた場所にあるイメージだ。

矢を射る場所の屋根のことを言っているのだろう。

「で、何かその隙間が気になったらしくて、しばらくそこを見ていたらいいんですよ。そうしたら……ゆつくりと黒い髪の毛が降りてきて、奈穂を睨む女の幽霊の顔が現れたらしいんです」

女の幽霊と聞くと、翔太が見ているものを思い浮かべてしまいそうになるが、今しがた男にしか見えないと言ったばかりだ。

私は無理矢理、違う幽霊を思い浮かべて話を聞く。

「で、俺も同じ高校の卒業生だったんで、妹を迎えに行った時に弓道場を見せてもらったんですよ。屋根裏も確認したんですけど、何もいなかった」

「なんだ。じゃあその幽霊はなんだったの？」

「まだ話は続くんですよ。でね、顧問の先生とも仲がよかったんですけど、来たついでだからって荷物運びをさせられたんですよ。結構大きな段ボール箱5箱くらい」

なんだか話を聞く度に、段ボール箱を運ばされているような印象を受けたが、私はあえてそこには触れないようにした。

「それでね、2箱と3箱で積まれた荷物を、倉庫に運んでたんですけど……1つ運んで2つ目を運ぼうと屈んだ時ですよ。いきなり！俺の頭上に矢が飛んできて、髪の毛を掠めたんです」

「いや、それ危ないでしょ。誰が射ったのよ」

想像するだけで肝が冷える状況だが、翔太は首を横に振る。

「それだけじゃないんです。壁に刺さった矢を見てたら……崩れるはずがない段ボール箱が崩れて、俺の上に落ちてきたんですよ。頭に直撃です。目から星が出るって、もう本当にそんな感じでした」

話に淀みがなく、あつけらかんとしている様子は、嘘や作り話をしているわけではなさそうで、不思議と真実だと思わせる雰囲気がある。

そもそもこの状況で作り話をする意味がないのだから、本当なのだろう。

「その段ボール箱はどうして崩れたの？下の段ボール箱が潰れて落ちたとか？」

「潰れるどころか、傾いてもいませんでしたよ。慌てて先生が走ってきて、矢を射たのは誰だとか、どうして段ボール箱が落ちたのか調べようとしてくれたんですけど、何もわからなかったんです」

「そこで女の幽霊は見たの？ それに、誰が射った矢かわからないなんてことある？」

尋ねると、翔太は何かを言いたいようだけと言葉にならない様子で、何度も口を開いては小さく唸ってを繰り返した。

「幽霊は見なかったんですけど……その、矢がね」

「矢がどうかした？」

「ボロボロで、かなり古い物だったんですよ。それこそ、誰も使っていないような。まあ、この話はこれだけなんですけど」

なぜそんな話をし始めたのかわからなかったが、奇妙な話だし、翔太にとっては恐ろしかったのだろう。

「それで、この話がどうかしたの？」

「奈穂が見たって言ってたから、同じ幽霊だって思い込んでたってわけです。だから皆見えてると勘違いしてたんですよ」

翔太と同じ立場なら、私もそのように感じていたかもしれない。

今は詳しい話はわからないから、ただ想像するしか方法がないけれど、徐々にではあるが、思いもよらなかった流れに乗り始めたのではないか。

初めは、翔太の心霊体験を聞くだけのつもりだったが、それが**家族**の話となり、**血筋**の話へと変

わっていく。

いつの時代から続く話かすらも未だわからないままに。

女の幽霊の恨み……もはや呪いに近いそれは、翔太や康太だけではない、**その血に連なる呪い**なのではないか。

「ところで、女の幽霊の話ばかり聞くけど、他の幽霊も見るとだよね？」

ほんの少しの沈黙の後、私は翔太に尋ねた。

「ああ、それは見ますよ。死んだばあちゃんを、命日に見たこともありますし、風が強い日に髪の毛を気にするハゲの幽霊を見たこともありますし。というか……その道の奥、なんか嫌な気配がします」

漁港が見える道、路地を指さした翔太に驚く。

まさか、こんなにも近くにそんな場所があるなどとは思わず、怖いという気持ちと好奇心がせめぎ合う。

「ほ、本当に？ ああ、そこが漁港だから、車を停めて見に行ってみる？」

僅かな時間で、好奇心が恐怖心を打ち負かしたようで、返事を待たずに漁港まで走って車を停めた。

「いや、まあいいんですけど……俺、危ないと思ったたらすぐに逃げますよ？」

「大丈夫。翔太くんが逃げたら私もそうするから！」

車から降りて、今通った緩やかな坂道を歩き、最初の路地を左に曲がる。

ここは車でも通れないような路地で、突き当たりまで街灯も1つしかない暗い道。
嫌な気配を感じるといふのも、なんとなくわかると私は身構えた。

「あの街灯の先ですね。前に1度通ったことがあるけど……もしかしてあの建物かな」
「初めてじゃないんだね。だったら少し安心かな」

「わかりませんよ？　昨日も言ったように、昼は陽の気で満ちてるから大丈夫ですけど、夜は陰の気に満ちてるから。俺が幽霊を見るのは夜が圧倒的に多いです。むしろ、女の幽霊でさえ昨日までは夜にしか見てませんでしたからね」

自信満々にそう言った翔太に、私は不安が強くなった。

蒸し暑い夏の終わりの夜。

ただでさえ怖い田舎の路地を、1人は霊感が強く、1人は好奇心が強い怖がりという変わった組み合わせの私達。翔太の服の裾を掴んだまま、街灯に近付く。

それと同時に、黒く、今にも潰れそうな家屋が見えてくる。

「うわ……何これ。誰も……住んでる感じじゃないよね」

「ここ、昔お化け屋敷とピンク映画をやってたらしいです。矢島さんが、お化け屋敷のゴールにある喫茶店で、炭酸の抜けたぬるいコーラを飲んだって言ってましたね」

「ああ、矢島さんが知ってる場所だったんだ」

それにしても、入口は固く閉じられ、どこからお化け屋敷に入るのかがわからないほどだ。
辛うじて残る受付の小窓が、建物の中と外を繋ぐ唯一の場所となっていた。

「……ど、どう？　何か感じる？」

「ヤバイですよここ。昨日見た青い家とはレベルが違います。矢島さんが高校生くらいの時に潰れたって言うってたから……30年近く放置されてるってことでしょ。それにお化け屋敷までやってたら……ダメだ。俺はこれ以上行けません」

道の端、その建物とは反対側の家の塀に、身体を押しつけるように立つ翔太は、手を口に当てて消えそうなほど小さな声で呟いた。

そう言われると危険な気がするのだが、いかんせん私に霊感はなく、ただ不気味と思うだけ。

「そんなに危険なの？　主にどの辺りに感じる？」

「言わなきゃダメですか？　受付の小窓があるでしょ？　その右側に、ツタが垂れてる板があるじゃないですか。その奥にヤバいのを感じます。俺がこの敷地に入ったら……舞さんには何も起こらないかもですけど、俺には絶対に何か起きてしまう自信があります」

建物から電柱に向かって、電線にまで這っているほどには、ツタまみれの黒い家。

まるで何かの境界線のように、道路と敷地を仕切る鉄杭とロープ。

入ろうと思えば自由に入れる緩い仕切りだが、誰も入りたくない謎めいた圧迫感がある。

「と、とりあえず写真を1枚撮って、車に戻ろうか。何か写るかもしれないし」

ポケットからスマホを取り出し、建物にレンズを向けた時だった。
バンッ！

と、建物の正面の入口から、壁を叩くような音が聞こえたのだ。

「ひっ！」

家鳴りとか、そんなレベルの音ではない。

まるで内側から誰かが壁を叩いたようなそんな音が、靈感のない私にも聞こえたのだった。

「な、何……今、家の中から音が……」

早く逃げたいと、身体がその体勢に入ると同時、好奇心をくすぐられ、次に何が起こるのかを確かめたがっている。

「ダ、ダメだ……これ以上はダメだって！ わかってますよね!? 俺、幽霊は見えるけど祓えないって！」

恐ろしい出来事が降りかかると途端に弱気になる翔太が、自分の服の裾を掴む私の手をギュッと握り締めて震え始める。

本当に何かが内側から叩いたのか、それともこのタイミングで何かが倒れて叩いたように聞こえただけなのか。

私が動かなくて逃げられず、完全にタイミングを失った翔太は必死に周囲を見回す。何かが見えたら逃げるつもりで確認をしているようだ。

「ひ、ひいっ！ 翔太くん、何あれ何あれ！」

悲鳴を上げて、指さしたのは受付の小窓。

そこに、虚ろな目をした人の顔のような物があり、それが私達のほうにゆっくりと向きを変えたのだ。

「うわあああああつ！ ちょ、ま、舞さん!? 放してくださいよ！」

逃げ出そうとする翔太に、ものすごい力でしがみつく。

火事場の馬鹿力という言葉があるが、巨体の翔太が動けない程の力を、平均的な体格の私が出しているのだから、別の恐ろしさを感じていたかもしれない。

だが、異変というものはそんなことを考慮などしてはくれない。

再び、バンバンと壁を叩くような音が周囲に響いた。

まるで、早く帰れと言っているかのような、2人を追い払おうとしているかのようなその音に、さすがに私もここにはまじりたくないと感じる。

翔太の手を引き、慌てて今来た道を走って引き返したのだった。

逃げることで頭の中がいつぱいで、他には何も考えられない。恐怖し、逃げている時は、どこまでも追いかけていられるような、まるで背後にいて触れられそうな錯覚に陥ることがある。

まさに今の私がそれだった。

「だ、だからダメだって言ったのに！」

「そ、そんなこと言われたって！ まさかあんなことが起こるなんて！」

走って走って、車に乗り込んで、やっと落ち着ける場所に帰ってこられたと安堵した。

怪談だと、幽霊が車の窓ガラスに手形を付けるなどという事象が発生するが、そういったことは特になく、とにかく呼吸を整えることに必死だった。

私にとっては、こんなことが起こったのは初めてで、まるで世界の終わりのような絶望と不安に